

令和4年度 「幼児教育研究協議会」研究概要

島尻地区

(協議主題番号) 2	(協議主題) 指導の作成、保育の展開、指導の評価・改善について
---------------	------------------------------------

1 研究にあたって（幼稚園からこども園への移行の取組み）

豊見城市は平成31年4月1日から公立のすべての幼稚園が認定こども園へ移行し、公立としては上田こども園一園が残り、小学校校舎の一部に併設された。

幼稚園での職員体制や運営方法もさることながら内容や進め方にも変容があり、保育と教育を融合させた内容を与えられた体制の中でより良く統合させていく取り組みが始まった。

まず、初めて取組む3歳児保育。そして、職員の時間差出退勤。その中での事務時間の確保。200名規模の子ども達に対しての園庭環境の課題、職員の配置。それらに対するの出来ることへの模索が始まった。市の協力の下徐々に職員数が確保出来るようになってきた為、保育への取組みの見直しが出来ようになり、3年目（昨年）教育計画の年間、期、月、週案様式等の見直しを進めてきた。

そして、こども園への移行4年目の本年、「幼児教育研究協議会」の研究を受けるにあたり「指導計画の作成、保育の展開、指導の過程の評価・改善について」の協議主題2がこども園として、これまで私たちが取り組んできている内容と関連していた為、選択するに至った。

こども園としての、「指導計画P・保育の展開D・指導の過程の評価C、改善A」を今年度も引き続き深めていきたい。

2 研究の視点

- (1) 幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるように指導計画を作成するには、どのような工夫が必要か。
- (2) 具体的なねらい及び内容を設定し、適切な環境を構成するに当たって、どのようなことを考慮する必要があるか。
- (3) 幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう、先生はどのような姿勢で援助をする必要があるか。
- (4) 幼児の実態等に即して指導の過程について評価を適切に行い、指導の改善を行うためには、どのような工夫が必要か。

3 研究の方法

- (1) 協議主題、協議の視点についての理論研究等を行い、共通理解を図る。
- (2) 協議（研究）の視点に基づいた研究を実践、展開していく。
- (3) 実践を振り返りながら、見直しを図る。
- (4) 研究の成果と課題をまとめる。

4 研究内容

研究の視点（1）

《幼児期にふさわしい生活とは》

乳幼児期は知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験から多くの事を学び、次第に様々な力が培われていく時期である。園児が生活を通して、身近な環境からの刺激を受け止め、自ら興味を持って環境に主体的にかかわりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが大切である。

そのためには

《発達を理解することが大切》

年齢ごとの平均的な発達像は園児一人一人を理解する際の参考であり、発達を理解することは一人一人の園児がどのようなことに興味や関心をもってきたか、興味や関心を持ったものに向かって自分の持てる力をどのように発揮してきたか、友達との関係はどのように変化してきたかなど、園生活を通して園児一人一人の発達の実情を理解していく必要がある。

また一人一人の生活経験により、発達の特性や発達の過程の違いが大きい時期でもあることに留意しつつ、幼児がどのような時期にどのような道筋で発達しているかという発達の過程を理解することも大切である。

このことから

《学年の実態に応じたドキュメンテーションを作成》

幼児理解が深まれば、生活や活動が発展していくための援助や関わりのヒントとなる。環境の再構成も幼児の活動に沿ったものとなる。物の配置だけでなく、幼児が主体的に活動を行なえるような状況を子ども達と一緒に作っていく為にも、各学年の実態に応じたドキュメンテーションを作成し、日々の保育へ繋げていけるように検討した。

	4月の様子	ドキュメンテーションの方法
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・集団経験が初の園児や小規模保育園からの園児がおり、全員が新入園児で新しい環境での生活である。集団活動よりも個々の活動が中心。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団でなく、個々に焦点を当てた読み取り（幼児理解）を中心に取り組む。 ・2人担任であることから、クラスで振り返りをする時や学年会議、指導計画作成時に活用する。
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・進級児が半数以上いることから活動の幅が広がり小集団で遊ぶ姿が見られる。 ・一方で新入園児は緊張からまだ保育教諭の側で過ごしたり、一人遊びを好む子もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の読み取りや活動している様子が共有できるようにマップ型ドキュメンテーションを活用。 ・クラスのどこでどんな活動が生まれていたか、共有できるようにクラスに掲示。保育教諭それぞれが子どもの様子を書き込むことで、お互いの視点や保育観にも気付けるように工夫した。そこから担任共通認識を図り、子ども同士の結びつきや援助方法を話し合い、友達関係や集団活動の幅を広げていけるようにする。
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・進級児は園生活に慣れているが、新入園児はまだ緊張した様子。 ・個々の遊びや単発的な遊びが多く、遊びの継続や展開が難しい様子。子ども達一人一人の発達や友達関係などの幼児理解を深め、必要な経験を模索していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・週案の裏面に SOAP の視点を取り入れ、マップ型ドキュメンテーションを作成。 ・幼児理解を深め、活動の振り返りや指導計画の作成に活かせるように取り組む。

研究の視点(2)

【これまでの課題】

- ・5歳児の教室は1F と 2F に分かれていた。そのため、学年同士の連携や子どもの活動の共通認識（子どもの姿や育ちなど）が難しく課題だった。また、5歳児の1Fクラスの午後の活動は3歳児の午睡時間に配慮することも多く、双方にとって課題のあるクラス配置だった。
- ・指導案の書き方について十分な園内研修が行えていない。
- ・週案と日誌が別紙であったため、週案を振り返る際の効率が悪かった。

【改善点】

《クラス配置》

- ・今年度より、学年同士連携が図りやすいように3歳児の2クラスを2Fへ。5歳児の4クラスを1Fに配置換えを行った。それにより、5歳児の連携が強化され共通認識も図りやすくなった。5歳児の活動の保障だけでなく、3歳児も落ち着いた雰囲気の中での教育・保育が出来るようになった。

《同学年の子どもの姿や育ちを共通認識していく工夫》

- ・週案を作成する前に学年会議を持ち、子どもの育ちや課題、今後の計画を話し合い、週案の方向性を共通認識できるように取り組むようにした。

《指導計画の書き方の見直し》

- ・「幼児の姿」は子どもの遊んでいる姿だけでなく、育っている姿、育ってきた姿など発達を含ませて記載するようにした。
- ・「ねらい」は「幼児の姿」=「ねらい」ではなく、1週間後の育ってほしい方向性としての「ねらい」を意識するようにした。
- ・「幼児の姿」→「ねらい」→「内容」が関連して書くように意識した。
- ・「環境構成」は幼児の発達の時期や環境への興味・関心、活動の展開を踏まえ、また、新しいものに出会えるような環境など、ねらいに向かうために必要な経験が得られるような状況や活動が発展するような状況を予想して記載するようにした。
- ・「援助」は子ども達への援助方法、アプローチ方法を記載した。

- ・「反省・評価」は週のねらいを振り返り、環境や保育教諭の援助、子どもの育ちがどのように変容していったか等、視点をもって書き次週に繋げるようにした。
- ・週案と日誌を1枚にまとめる事で、週の見通しを持ちながら、日々の振り返りを行なえることにした。

令和4年度 週案		今月のねらい		内容		主幹		担任	
発達の過程		「幼児の育っている姿」、「育ちつつある姿」、「課題」を含め各学年共通して見られる姿を書くようにした。		子どもの姿を読み取り、育ってほしい方向性として「ねらい」の設定。		子どもが主体的に環境に関わって経験することが出来るような内容を記載。			
幼児の姿		ねらい		内容		(月) 月 日	週の活動計画、援助方法、活動の反省、「ねらい」に立ち戻って振り返りながら日誌の記入。		
予想される幼児の活動 □環境構成 ◎保育教諭の援助	幼児の姿→ねらい→内容が関連しているか意識して書く					(火) 月 日			
基本的な生活習慣	活動&環境 ・子どもの遊びや生活する姿を踏まえ、ねらいに向かうために必要な活動や環境を記載。その際、学年で共通している活動を具体的に記入。その他、クラスの実態に応じた活動も追加記入。					月 日			
行事	月					月 日			
主な活動						(木) 月 日			
午後						月 日			
反省・評価	ねらいを振り返って、子どもたちの成長や課題について記載					(金) 月 日			

研究の視点 (3)

《保育教諭の姿勢と援助》

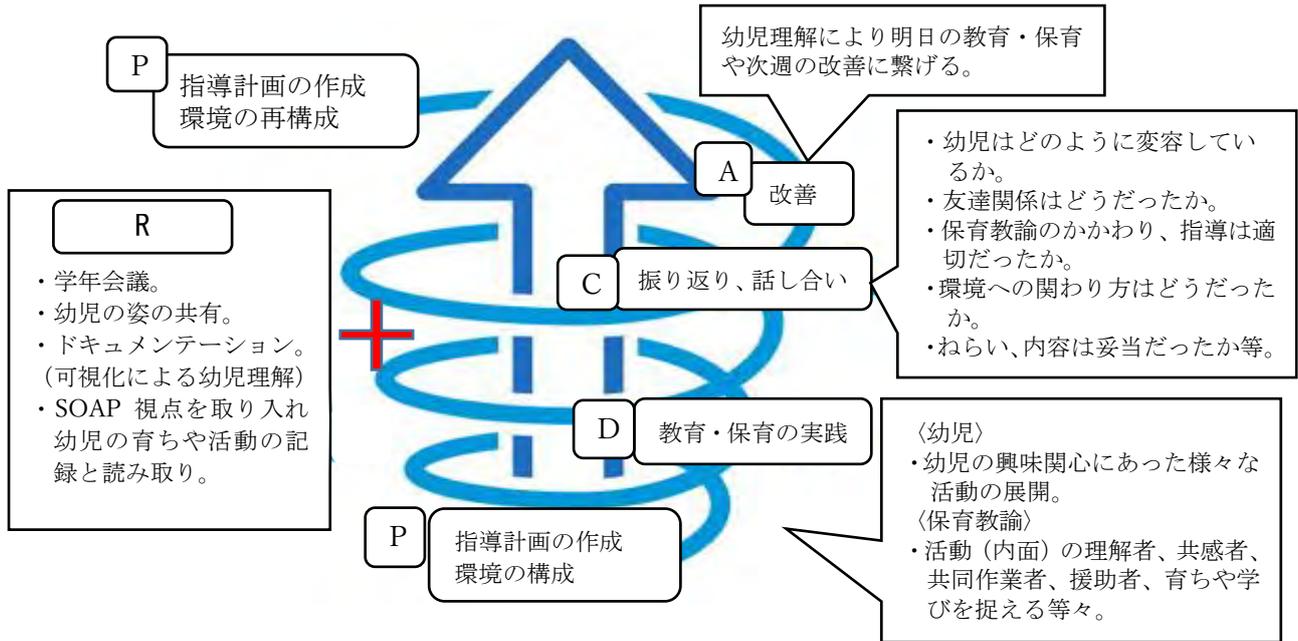
園児の主体性を重視するあまり、「園児をただ遊ばせている」だけでは、教育及び保育は成り立たない。また、幼児教育は保育教諭主導の一方的な保育の展開であってもいけない。子どもの興味・関心を探り、何を実現しようとしているのか、何が育とうとしているのか、今の活動からどのような体験を積み重ねているのか、困っていることは何か等、園児の生活する姿や内面の変化、育ちを捉えそれに応じた援助を心がけ、また幼児の主体性と保育教諭の意図を絡ませた教育・保育を展開していくために日々の記録や日誌、ドキュメンテーション、また担任会議、学年会議等を通して、保育教諭の関わりや援助方法を振り返るようにした。

	学年の実態に応じた保育教諭の姿勢と援助の視点 (一部抜粋)
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・友達・相手に自分の思いを伝えていけるように、思いを言語化(代弁)していく。 ・基本的な生活習慣獲得に向けて必要な言葉を伝えていく。 ・安心して過ごせる環境を整え、一緒に遊び、楽しさが共有できるような関わり。 ・子どもの活動を読み取り、その時期に合った環境づくり (遊びの精選 (種類・数))。
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの興味・関心を読み取った環境づくり。 ・子ども同士の思いをつなぐ援助、思いを伝え合えるような丁寧な仲立ち。 ・友達の思いや遊びを共有する振り返りの場の設定。
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの活動の仲立ちや言葉の補足、共同作業 (仲間)。 ・活動を振り返り、子ども達の目的やイメージの共通理解が図れるように思いを伝え合える場の設定。(活動の状況に応じてサークルタイムも一つの援助方法として取り入れている) ・力を合わせ、問題解決に向かって行けるような働きかけ。 ・集団の中で自己発揮し、主体的で対話的で深い学びに繋がるような活動の展開。

研究の視点 (4)

計画(指導計画) (P) 実践(教育・保育) (D) 評価(振り返り、話し合い) (C) 改善((明日の教育・保育の準備)) (A) のサイクルの中で、今回、園全体で組織的、計画的に研修を行い、担任同士や学年での話し合いの時間、課題を共有し、記録を取る工夫と実践を繰り返して行ってきたところ、幼児の読み取り(リサーチ R)の内容が深まり、指導の改善がより幼児の実態に沿ったものに近くなったと思う。指導計画作成には、まず幼児理解が基本で、そのために様々な方向から子どもを捉えていくことが大切であることを改めて確認できた。

《PDCA サイクル（指導の作成、保育の展開、指導の評価・改善）》



実践事例 1

『砂場にプールを作ってみよう！』

3 歳児

〈幼児の姿〉

- ・砂場でそれぞれおままごとをしているが、容器に砂を入れてこぼすを繰り返して、なかなか発展しない様子。保育教諭の側で過ごしたり、いじり遊びも多く見られる。

〈保育教諭の願い〉

- ・もっとダイナミックに砂遊びを楽しんでほしい。
- ・友達と一緒に過ごす心地よさや、楽しさを味わってほしい。
- ・遊びの中で砂の性質に気付いてほしい。



□環境構成 ◎保育教諭の援助

- ◎近くにいた子ども達と一緒に穴を掘ってみよう誘い、興味をもてるような言葉かけの工夫をする。
- ◎子どもの声を拾い、一緒にプールづくりを楽しむ中で気づきや考えに共感する。
- 子ども達のアイデアから出た遊具を状況に応じて用意する。(バケツ、トイ、ビニール袋、テーブルクロスなど)

【砂が水を飲んじゃった！！】

砂場で穴を掘っていると、「この穴に水を入れたらプールみたいだね」と水を入れ始めた。

S 男：「あれ！？砂が水を飲んじゃった！！」

保育教諭：「水はどこに行ったのかな？」

S 子：「掘ってみよう、中から水が出てくるかも」

S 男：「う～ん。どうしたら溜まるのかな」

保育教諭：「帰りの会でみんなにも聞いてみようか」



誰かが砂の中で吸って
るんじゃない？

みんなでお水を
沢山入れてみよう

砂が柔らかい
からかも・・・

帰りの会で出た子ども達の意見

穴の中に箱やバケツ、
シートを置いてみたい

雨の水はたまるかな

砂をもっと
掘ってみる

〈考察(読み取り)〉

振り返りの場を設けたことで、興味を持つ子が増え始めた。「砂が柔らかいからじゃない?」「砂の中で誰かが吸ってるのかも」など想像力を膨らませながら、自分の考えを保育教諭や友達に伝える楽しさは、一人遊びの中では気づかない楽しさだったのではないかと思う。

【振り返りで出たアイデアを実験してみよう!】

【実験①】

せーの! でみんなで流してみる。

T 男 : 「たまった! たまった!」

K 子 : 「でもまた全部なくなっちゃった…」

保育教諭 : 「もう一回やってみたら?」

4~5回繰り返し試してみた。

【実験②】

小さいビニール袋を敷いてみる。

K 子 : 「ちょっと水がたまったね」

S 男 : 「周りの砂が水を吸ってるよ」

S 子 : 「ビニール袋あと一枚敷いてみよう」

小さいビニール袋を二枚

敷いてみるが・・・

「もっとためたいなあ…」という気持ち。

非認知能力の育ち



協力

好奇心・探求心



試行錯誤・工夫

集中力

製作遊びで使っていたテーブルクロス
が使えることに気付いた子ども達。

【実験③】

テーブルクロスを使ってみる。

「広げるの手伝って〜」と協力しながら敷いた
後、穴の中に水を入れてみる。

S 子 : 「やった〜! けっこう溜まったね!!」

E 男 : 「みんなで入ってみよう」

Y 子 : 「冷たくて気持ちいい! プールみたい。」



満足感

<考察(読み取り)>

- ・数日間、繰り返し試す中で「雨の水もたまらないね」「でも畑には水たまりができていよ」など砂の性質に気付き始める姿がある。また、興味を持つ子が増えたことで「明日もやりたい」と遊びが継続していったのではないかと考える。
- ・3歳児なりに小さな達成感を感じたことで、友達との関りが深まったように感じる。

<成果と課題>

- ・個々から小集団になり、一緒に試したり考えたり『楽しい』を共有することで、主体的に遊びを進めて行こうとする姿に繋がっていった。
- ・保育教諭も一緒に関わることで、安心して遊ぶことができ、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わうことができたのではないかと考える。
- ・まだまだ自分の遊びを楽しむことで精一杯の三歳児だが、このような経験を重ね、少しずつみんなまで過ごす心地よさや、楽しさが味わえるようにしていきたい。

実践事例2

「枝豆の栽培活動&えだまめ事件勃発?!」

4歳児

<えだまめしんぶん>

- ・5月6日に植えた枝豆が、5日後に芽を出していることに気付いた子ども達。枝豆の殻を被って出てきた様子を見て「枝豆の赤ちゃんが出てきた!」と喜んだり、友達や保育教諭に教える姿が見られる。

しかし・・・

- ・すぐに梅雨入りしたことで、枝豆の生長を楽しみにする子は毎日様子を観察しているが、園庭に出る機会が減り全体的に枝豆に対する関心が薄れてきている。



梅雨明け



<読み取り>

- ・初めは自分たちが植えた枝豆の芽が出ていることへの嬉しさ、生長することへの楽しみや期待感を抱いていた様子。
- ・梅雨入りし、水やりができないことと園庭に出られる日が少なくなったことから、栽培物に触れる機会が減り、興味・関心が薄れてきている。

<保育教諭の願い>

- ・子ども達が枝豆の生長に関心を高めてくれるにはどうすれば良いか。
- ・観察することが楽しくなってほしい。

<援助・環境構成>

- ・「えだまめしんぶん」を掲示し、枝豆の生長を比較したりクイズ形式で枝豆に興味・関心がもてるようにしてみた。
- ・虫好きも多いため、枝豆の葉を食べている犯人(虫)探しをすることで、自ら関わられるような声かけをしてみる。
- ・みんなで生長の様子や不思議に思ったことを話し合う場を設けたり、絵本の読み聞かせを通して興味関心が持てるよう関わる。



<幼児の変容>

- ・『えだまめしんぶん』に興味を示し、実物と写真を比較してみたり、友達にクイズを出してみたり、いろいろな気づきを楽しむ姿が見られる。
- ・写真で生長過程を掲示することで、生長しているのを実感し収穫への期待感や栽培活動への意欲が高まった。
- ・子どもたちの疑問や気づきを新聞にすることで、子どもたち同士での会話のきっかけにもなり、発見や気づき(葉が食べられていることや、虫がついていること等)から枝豆を守ろうと行動に移す姿も見られた。



<幼児の姿>

- ・いつものように枝豆の水やりをして園庭遊びをしていると、T児とY児の動きがなんだか怪しい…。保育教諭が近づいて様子を見てみると、枝豆の茎が折れ、周りにはもぎ取られた枝豆がいくつか散乱。二人に話を聞いてみると、枝豆の収穫が待ちきれずこっそり食べてよう(生のまま)と思っていたとの事。申し訳ない気持ちもあるようで、隠そうとした様子であった。

<読み取り>

<保育教諭の願い>

- ・えだまめ栽培に興味関心をもって関わる中で、収穫を楽しみにする気持ちが我慢できなかったのかな。
- ・生長した枝豆を見て、「早く食べたい、味見くらいなら、、、」という気持ちがあった様子。
- ・枝豆を栽培収穫するのは初めての体験だから、生のまま食べられると思っているのかな？

- ・収穫を楽しみにする気持ちを大切にしつつ、みんなの気持ちにも気付いて欲しい。
- ・収穫への期待感が高まっているが、我慢する必要性にも気付いて欲しい。
- ・栽培活動を通して食への関心も高められたらいいな。

<援助・環境構成>

- ・とってしまった枝豆を茹でてみんなで味見してみることで、匂いや実の大きさ、味を知り、収穫への楽しみや期待感に繋げられるようにした。
- ・全体で話し合いの場を持ち、みんなも収穫を楽しみにしていることや、世話を頑張っていることに気付けるようにした。

<幼児の変容>

- ・生の枝豆・茹でた枝豆の匂いを比較し、違いや食べ方(調理の必要性)に気付いた様子。
- ・T児Y児も「美味しいけど、実が大きかったらもっと美味しいはず」と新たな発見・気づきを実体験することで次の収穫を楽しみにする様子が見られる。
- ・収穫を楽しみにしているのは自分たちだけではないことに気付いた様子。

<考察>

- ・今回の発端は「栽培物への興味」や「成長への期待感」が引き起こした事例だったと考える。勝手にとってしまった行為をダメで終わらせるのではなく、子どもたちの気持ちもくみ取りながら、クラス全員で考えたことで友達の気持ちに気付いたり、我慢する必要性を知るきっかけになったのではと感じた。

<成果と課題>

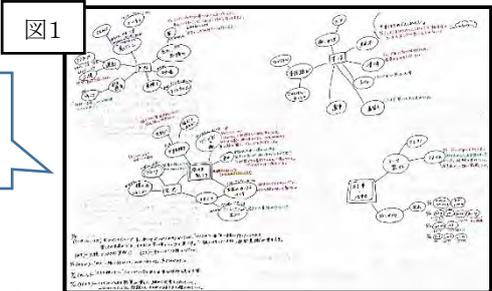
- ・『えだまめしんぶん』を作ったことで生長の様子が見える化したり、子どもたちの気づきや疑問と一緒に考えながら栽培活動を行うことで、興味関心を高めることができた。
- ・栽培過程でいろいろな問題もあったが、失敗やトラブルなどの実体験を通して、子ども達と一緒に悩んだり振り返ることで気付くことも多かった。
- ・自然体験や栽培活動の機会が少なくなっている中、子ども達の気づきや疑問等を大切に、感じたり考えたり表現する活動(行動)を通して今後も遊びや生活の中で『自然』や『栽培物』に触れる機会を意図的に設けていく必要性を感じた。



実践事例3 ～『おおきなふねをつくろう』イメージをつなげて協同の遊びへ～ 5歳児

[2期のキーワード：周囲の人や物への興味や関心が広がり、自分で遊びを広げていく]
 〈子どもの姿〉6月：廃材製作が盛り上がり、空き箱やカップ容器などを繋げたり、ストローや花紙などの細かい素材を取り合わせたりしてイメージ（車、飛行機、ジュース、アイスなど）を作り、楽しむ姿がある。

この時期、週案には個々の遊びの広がりや友達との繋がりなど、読み取った姿をウェブ型記録で書き記していき、週や月のねらいと照らし合わせながら保育を進めた。（※図1参照）



実践エピソード～「大きい船作ってみる？」～

朝の時間に「ガンピーさんのふなあそび」の読み聞かせ後、「折り紙で船をつくったよ。ダンボールでもつくってみようかな」とY児。「どんな船にするの?」と聞くと「この箱とこの箱をくっつけてね…」とイメージを話し始める。
 〈保育教諭の読み取りと願い〉

☆イメージを形にすることを楽しみにしているんだな。作りたい船のイメージが膨らみ実現したい思いがあるんだな。
 ☆Yさんはこれまで箱製作の経験を重ねてきたので、製作遊びの楽しさをもっと広げていってほしい。

〈環境構成〉
 ◆様々な大きさのダンボール材を用意する。
 ◆イメージを持ちやすい乗り物図鑑を用意する。
 ◆ダンボールを大きく広げられるようワゴンやテーブル等の配置を再構成し、スペースをつくる。

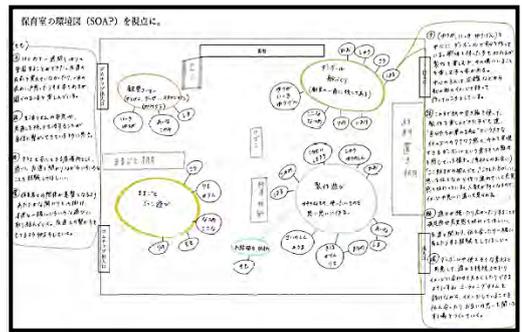
〈保育教諭の援助〉
 ◎「自分が乗れるような船を作ってみたら面白いんじゃない? ちょうど大きなダンボールがあるから開いてみようか」とY児に新しい遊び方を提案してみる。
 ◎会話の中から「どのように作りたいか」「何が必要か」イメージを受けとめ、具体化していく。

そこに仲良しのA児とB児も加わり、すぐに図鑑を取り出してきて「船ってどんな形にする?」「3人で入れるようにしよう」「まずは横のところ(壁)を作らないと」と下に敷いたダンボールに垂直になるように、開いたダンボールを繋ぎ合わせ3人で製作を進めていく。次第に、「ぼくがガムテープを切るから、ここ押さえてね」「じゃあ自分ももっとダンボール取ってくるよ」などと話しながら役割に分かれ、側面を作り進めている。製作中も「これは戦う船」「潜水艦だよ」と船のイメージを伝え合い会話を楽しむ姿が見られた。興味を持った他3～4人も加わるが、ダンボールの中で座ることに満足し、作業に参加する姿はなかった。この日は製作途中の船を保管し、「明日も続きやるんだ」と期待を残して遊びを終えた。帰りの発表タイムでは「船を作って楽しかった」「まだ完成じゃないから続きを明日やりたい」と感想があった。



- この時期に、個々の姿から集団の遊びに目を向けて、遊びの中のエピソードを『SOAP』の視点を取り入れたマップ型ドキュメンテーションにして週案に記録していき、翌日や次週の計画へ繋げていった。
(※図2参照)

図2



〈保育教諭の読み取りと願い〉



☆“自分が乗れる船”という大きなイメージへのワクワク感や期待と、それを実現できるダンボールという素材への魅力を感じている様子。
☆友達と思いを伝え合いながら作り進めていく楽しさもあるが、それぞれのイメージや思いに違いも見られるので、話し合いながら共有する体験に繋がってほしい。

〈環境構成〉

- ◆段ボールやガムテープを追加し多めに用意しておく。
- ◆より具体的にイメージを持ち、共有できるよう遊覧船や潜水艦、クルーズ船の見本写真を用意する。
- ◆イメージを再現できるようスズランテープや包装紙、カラーポリ袋など様々な素材を用意しておく。

〈保育教諭の援助〉

- ◎保育教諭も仲間として遊びに加わり、必要な場面で一緒に話し合ったり提案したりする。
- ◎友達の良さに気付いたり、共有する楽しさを味わったりできるような言葉かけをしていく。
- ◎帰りの集まりや遊びの最中に振り返りや話し合いの場を設け、子ども達が思いや考えを共有し、遊びの見通しが持てるよう援助していく。

～「どうしたら屋根ができるかな？」～

提示された写真を見て、「こんな潜水艦にする」「旗をつけたい」など思いを言葉にしながら船づくりの話で盛り上がるY児、A児とB児の3人。「でもやっぱりまずは屋根から作らないと」「そうだね」と意見が合致し船の屋根づくりに取り掛かる。「昨日はテープをちょっとしか貼っていなかったからすぐ崩れてたよ」と前日夕方の出来事を話すB児。「じゃあガムテープ長くして貼ろう」「たくさん貼ったらいいんじゃない」と相談し合い、作ってみるがうまく壁の部分が立たずに倒れてしまっていた。まだ経験の少ない子どもの実態を踏まえ、ここで気持ちが途切れないようタイミングを見ながら保育教諭も一緒に話し合いに参加し、ヒントを出したり一緒に作業したりするなど援助していった。

すると、昨日船の中に座り込んでいた3人もガムテープを持ち出し、7～8人の子が船づくりに参加する姿が見られた。屋根まで出来上がると「すごい!」「お部屋みたいになった」と喜ぶ子どもたち。ひと段落したところで参加していた子どもたちを集めミーティングタイムを設けた。「朝、Yさんが旗を付けたいって言っていたよね、何色の旗がいいかな」と投げかけると、それぞれに意見が分かれる。「こんなにいっぱいはい付けられないよ!」とA児。「みんなで話し合ってひとつに決めてみる?」と再度提案から話し合うと、旗は紫色に決まった。その日の振り返りでは、「船を作った全員で前に出よう」と発表の場に出て、船づくりで感じたことを話していた。後から参加した子ども達も仲間に加わったことが嬉しいようで、作る楽しさの他にも、友達と繋がる喜びを感じていた様子であった。楽しそうな雰囲気が伝わることで「明日は自分も一緒にやる」「仲間になっていい?」と興味を持つ子が増え、翌日以降もメンバーが入れ替わりながらも船づくりを楽しんだ。

旗も立ち船らしくなった。屋根は低いが、一度完成する。



「ダンボールを足して屋根を高くしよう」と試行錯誤しながら改良していく。



クラスのシンボルのようになった船。



〈幼児の変容〉

- ・子ども同士自分の思いや考えを言葉にして伝え合うようになり、アイデアを出し合い、遊びを広げていこうとする姿が見られるようになった。
- ・一人遊びが多かった子ははじめは誘われて船づくりに参加していたが、遊びを共有する中で友達や保育教諭とのつながりを感じ、自ら遊びに加わろうとする姿が見られるようになった。
- ・みんなに伝えたいことや相談したいことがあれば「まるまるタイムで話そう」という声上がり、子ども達が必要感を感じてミーティングタイム（まるまるタイム）を活用し、生活の中に話し合いをすることが位置付いていった。

〈考察〉

- ・保育教諭が園児の遊びの理解者や共同作業員として、楽しさに共感したり、やりたい思いに応えたりしていくことで、遊びがより魅力的なものになったのではないかと。また必要な場面で助言や提案ができたことが遊びの継続につながり、友達と満足感を味わう経験に繋がったのではないかと。
- ・活動の振り返りやミーティングタイムを設けることで、思いや考えを出し合い、気持ちや体験を共有することができたのではないかと。その中で “一緒に遊んだ仲間” “みんなで作り上げた船” など協同の意識が芽生え、「明日もやりたい」「次はこうしたい」と期待や意欲を持つことに繋がっていったのではないかと。

〈成果と課題〉

- ・これまで実践してきた「ウェブ型記録」に加え、「マップ型記録」「“SOAP”の視点」を取り入れるなど、保育の記録を工夫していくことで活動全体の見通しを立てたり、一人一人に焦点を当て計画や環境を見直したりと、具体的な援助や環境構成について考えることができた。
- ・話し合う活動を大切にしてきたことで伝え合う力が育ち、一つのことを主体的に捉え、共通の目的について考えたり、意見を出し合ったりする姿が見られるようになった。子どもの主体的な遊びを大切にしながら、今後も協同的な遊びの展開や発展を支えられるように、ファシリテーターとしての保育教諭の援助についても模索していきたい。

5 成果

- ・ドキュメンテーションを取り入れたことで幼児の姿の読み取りや保育の振り返りをこれまで以上に意識して行うようになり、幼児の実態により近い指導計画の作成に繋がった。
- ・担任同士で幼児の姿、現在の発達等を話し合ったり、共通理解していくことで発達に即した環境構成や援助の視点を持つことが出来た。また、園内研修やノンコンタクトタイムの活用により、職員全体の共通認識の場が持てるようになった。

6 課題

- ・ドキュメンテーション等を利用しての保護者との共有の見直し。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を含めた、3年間の見通しを持った教育・保育の実践の向上。

7 改善策

- ・ドキュメンテーションやクラス便り等を通して子ども達の成長発達、実態を、保護者にも共有出来るように全学年で方法を検討していきたい。
- ・今後は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を含め、3年間の見通しを持った教育・保育の実践に繋げていけるように、提案、検討の時間を確保していきたい。

【参考文献】

- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
- ・日本版保育ドキュメンテーションのすすめ
- ・幼保連携型認定こども園における 園児が心を寄せる環境の構成